

《ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より》乗原成郎訳

想像力という小箱

Pudełko zwane wyobraźnią

指で壁をたたいてみてごらん—
櫛の切株から
とび出してくるよ
お人形さんが

樹を呼び出すよ
一本また一本と
ついに出来るよ
森が

口笛を吹いてごらん 静かにね
おや流れ出したよ 小川が
強い糸だよ
山と谷をつなぐ糸だよ

咳払いをしてごらん 意味ありげに—
ほら 都市(まち)が出来たよ
一基の望楼が立ち
狭間(はざま)を設けた城壁があり
黄金(こがね)色の家並みがある
遊び道具の
骰子(さいころ)を投げたようだね

今度は
目を閉じてごらん
雪が降ってきて
消してしまうよ
樹々の緑の炎を
赤い望楼を

雪の下には
夜がある
その頂には煌(きらめ)く大時計があり
風景画の梟(ふくろう)が止まっている

木製の小鳥 Ptak z drzewa

子どもたちの
熱い手の中で
木製の小鳥は
生きはじめ

ラッカー塗りの羽根の下で
小さな心臓が溢れ出た

ガラスの目が
眼差しとなって燃え上がった

色塗りの翼が
動き出した

乾いた体が
森へ行きたがった

行進していった
バラードの兵士のように
脚の撥(ばち)で太鼓をたたいて
右の脚でたたくと—森
左の脚でたたくと—森
夢に見た
緑色の光と
閉じた目の瞼(まぶた)の
底に罅(ねぐら)を

森のはずれで
啄木鳥(きつつき)たちが彼の目をつつき出した
がさつな嘴(くちばし)の拷問のために
小さな心臓は黒ずんだ
それでも先へ進んでいった
毒きのこにぶつかり
高麗(こうらい)鶯(うぐいす)たちに嘲笑(あざわら)われて
死んだ落ち葉の下に
罅を探した

今や生きている
有り得ない境界に
蘇生した物質と
考案された物質との間に
森の羊歯(しだ)と
ラルース辞典の羊歯との間に
一本の枯れた茎の上に
一本の脚の上に
風の髪の上に
現実からちぎれ落ちた物の上に
心臓が十分に無い
力が十分に無い物の上に

画像に
生まれ変わることはない

(Zbigniew Herbert “Studium przedmiotu”
『事物研究』より)

《ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より》 栗原成郎訳

Zbigniew Herbert

Pudełko zwane wyobraźnią

Zastukaj palcem w ścianę –
z dębowego klocka
wyskoczy
kukułka

wywołaj drzewa
jedno i drugie
aż stanie
las

zaświstaj cienko –
a pobiegnie rzeka
mocna nić
która zwiąże góry z dolinami

chrząknij znacząco –
oto miasto
z jedną wieżą
szczybatym murem
i domkami żółtymi
jak kostki do gry

teraz
zamknij oczy
spadnie śnieg
zgasi
zielone płomyki drzew
wieżę czerwoną

pod śniegiem
jest noc
z błyszczącym zegarem na szczycie
sowa krajobrazu

事物たち

無生物の事物たちはつねに完璧無欠であって、不幸なことに、干渉し得るところは一点も無い。わたくしは椅子が脚を組み替えるのを一度も見たことがなく、寝台が後ろ脚で立つのを見たことがない。同様に、食卓は、たとえ疲れている時でも、あえて膝をつこうとはしない。事物たちは、わたくしたちの不安定性を絶えず諫めるために教育的な配慮からこのことをするのはないだろうか、とわたくしは思う。

Przedmioty

Przedmioty martwe są zawsze w porządku i nic im, niestety, nie można zarzucić. Nie udało mi się nigdy zauważyć krzesła, które przestępuje z nogi na noge, ani łóżka, które staje dęba. Także stoły, nawet kiedy są zmęczone, nie odważą się przykłęknąć. Podejrzewam, że przedmioty robią to ze względów wychowawczych, aby wzięły nam wypominać naszą niestałość

(from „Zbigniew Herbert 89 wierszy”)

母とその息子

森のはずれの小屋の中で母親と息子が悠々自適の生活を送っていた。母子の愛は固かった。非常に。共に日没を眺めて過ごし、慣れ親しんだ歳月を育てていた。二人とも死にたくなかった。しかしママが死んだ。お母さんっ子は一人ぼっちになった。実際に、それは寝台の方角を向いた十分に古びた小さな絨毯(じゅうたん)だった。

Matka i jej synek

W chatce na skraju lasu mieszkała sobie matka i jej synek. Oni kochali się. Bardzo. Razem oglądali zachody słońca i hodowali oswojone minuty. Nie chcieli także umrzeć. Ale mama umarła. Synek został. Naprawdę był to dość stary dywanik pod łóżko.

(from „Hermes, pies i gwiazda”)

ズビグニェフ・ヘルベルト(1924~98)ポーランドの詩人、エッセイスト、劇作家。第二次世界大戦中は国内軍に所属しレジスタンス活動に加わった。1950年代に詩を出版しはじめたが、間もなく自らの意思で政府公認の出版物に書くのをやめ、1980年代に主に地下出版で発表を再開、戦後ポーランドの反体制派詩人の代表者、最も有名な、最も数多く(38カ国語に)翻訳された作家の一人となり、何度もノーベル賞候補に挙げられた。

1986~92年にはパリに住み「文学手帖」誌に寄稿。2008年、2018年は政府・議会によって「ヘルベルト年」と宣言され、2013年にはズビグニェフ・ヘルベルト国際文学賞が設けられた。

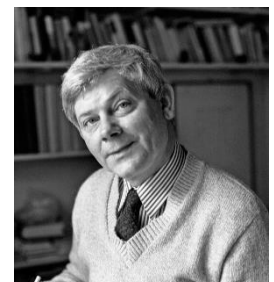


photo: Bohdan Majewski / Forum, 1974